

志田學士の越谷吾山を讀んで

龜田次郎

最早三十五六年も昔の事であるが、自分が東大在學當時、保科先生の國語學史の講義で、越谷吾山の「物類稱呼」が、國語方言唯一の辭書であることを教へられた。自分は此が動機となつて、此書を精讀し、爾來、常に座右

に供へて參考に資してゐるのである。其時分に又此人の著述「壺槽」を讀んで、「物類稱呼」の所説の訂正したのを知つたり、又「朱紫」を見て俳聖芭蕉の句解を知つたりした。然し此人の傳記に至つては、只、僅に武藏國越谷の人で、江戸日本橋望町に住んで居て、曲亭馬琴翁青年時代の俳諧の師匠であつた事丈を知り得たに過ぎなかつたのである。爾後、其詳傳を知りたいと、始終心懸けてゐたのである。近年方言の研究が勃興してから、其著述や傳記が漸次明かになつて來たので、自分は大に喜んでゐたのである。頃日、越谷吾山の事蹟を顯彰する爲に、郷地越谷に設立された記念事業會から、同學志田文學士を

煩はして本書を刊行されたのである。誠に其美舉を感謝する次第である。著者から自分に本書を惠贈されたので、直に精讀したが、聊、卑見を述べる事とした。

本書は全篇を越谷吾山の出自、江戸住、家庭、俳歴、著述、周圍、俳風に分ち、なほ新に編した俳句集を添へ、口繪押繪に、肖像、短冊、墳墓、點印句等が收めてある。著者が短時日に、此の精密該博な研究を公にせられた事は、實に感歎に堪へぬ。只、自分が望蜀の點は、「物類稱呼」や「壺槽」の語學的方面の事柄を詳論して欲しかつたのである。足利末葉世の動亂につれて、變つて行く言葉に對する歎息は、標準語、卑俗語の意識を呼び起し、降つて、徳川の治下、諸國の人々の往來が頻繁となるにつけ、各地方語の接觸の機會を與へて茲に方言の意識を促進したのである。就中俳諧師には方言、卑語に關心を有してゐた者が多かつたのである。斯る機運から、

「物類稱呼」の様な劃期的な方言辭書も現はれたのであらうとおもふ。又、本書に屢、引用されてゐる吾山の追善集「もとの水」は原題簽が削落してゐる爲に、後人の假に名付けた所で、原題簽を存する完本では「ゆきを花」の表題があるとの事である。尙早稻田大學圖書館に吾山に關する資料が豊富に所藏されてゐるとの事である。著者は、他日本書刊行後に發見された此等の新資料に據て、更に増補改修を加へて、完備を期せられる相である。自分は、此完成を鶴首待望してゐる。縦、其創業のものとして、

多少の遺漏があり、尙、今後の補正改修が行はれるにせよ、從來、殆んど全く不明であつた吾山の事蹟を、闡明された著者の苦心と努力とは、永久に忘れてはならぬ。自分は之に對して萬腔の感謝を表する者である。殊に著者が吾山の俳諧方面の研究は、流石に斯界に於ける著者の學識造詣を窺せしめ、他人の追従を許さぬ所がある。自分は茲に本書を讀んで其所思を憚なく述べた。終に臨んで、自分は著者が、自愛、益、奮勵して、其詳傳の完成を遂げられん事を切に希望する。妄評多罪。